

香川県立香川東部支援学校  
人権・同和教育部

小学部部主事 宮本 広江



## 「ふわふわさんと ちくちくさん」

「いっしょにいこうよ」には、各学部の人権学習についての記載があり、今回小学部は9月に実施された人権教室についての報告になっています。人権については、人権教室のみでなく、日々の生活や学習、遊びを通して、指導者や友達と関わるなかで自然に学んでいることを踏まえて、各学年、時間を設定して学習をしています。人権という言葉は小学部の児童には難しいですが、一人一人の違いを認めたり、自分や友達のよいところを見つけたりして、それぞれが大切な存在であることを知る、という学習は折に触れて行っています。

例えばどのような学習をしているかを紹介いたします。小学部の児童にとって身近なこととして捉えられるように、日常生活のなかで起きる場面を二つ設定して提示（指導者が二つの場面を実演、もしくは、絵カードで二つの場面を提示）します。すると、小学部の低学年の児童も、こっちはマル、こっちはバツ、とよい言葉やよい行動の場面や絵カードを選択するのです。その行為、言動を自分のこととして受け止め考えられるのは、低学年の頃はまだまだ難しいですが、どっちがいいのかな、という学習や実際に経験を積み重ねるなかで、自分のこととして考えられるようになっていきます。

小学部では「ふわふわさんと ちくちくさん」として学習することが多いです。「ふわふわさんと ちくちくさん」の学習をした学年において、数日後に、友達とのやりとりのなかで大声を出して怒っている児童がいました。学年の指導者から「あら、ちくちくさんじゃない？」と指摘され、その児童はハツとして「ちくちくさん、出ていけ」と言って、手で自分の体から「ちくちくさん」を追い出す仕草をしていました。私自身も低学年の学級で、友達に「貸して」「かわって」と言われて「いやだ」と応じる実演をし、どう感じるか、どうしたらよいか考える学習をしたことがあります。どう思ったか尋ねると、学級の児童の多くが「つらい」と言ったり、泣き出したり…。「いや」と応じると相手が辛い思いをすると実感するとともに、「いや」と言ういつもと違う先生に驚いてショックを受けているようでした。人の痛みの分かる児童に動揺を与えて申し訳ない気持ちになりました。安心して信頼できる大人でなければと改めて感じました。

子ども達は純粋です。学習したことがすんなりと入っていきます。純粋で葛藤をしています。我々、年長者である大人が気を引き締め、よい手本とならないといけません。子ども達も葛藤しながら学んでいます。「ちくちくさん、出ていけ。ふわふわさん、おいでおいで」と。

## 人権学習の様子

7月から9月にかけて全校児童生徒を対象に人権学習を実施しました。学部ごとに取り組んだ学習の内容と児童生徒の様子を紹介します。

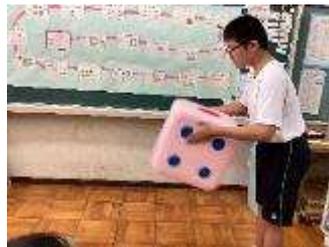
### ○小学部○【人権教室 ～おおきなかぶ～】

9月22日に小学部全体で人権教室がありました。さぬき市の人権擁護委員の方々が来校され、「おおきなかぶ」の劇をしてくれました。劇では、子どもたちも一緒に参加し、かぶを引っ張ったり、「うんとこしょ、どっこいしょ」の掛け声を掛けたりしました。一人では抜けない大きなかぶも、みんなで協力することで抜くことができました。また、「世界をシェアに」の音楽にあわせて、人KEN まもる君と人KEN あゆみちゃんのバルーン人形が登場し、子どもたちは大喜び！「好きな食べ物は何か？」「どこに住んでいるのですか？」などたくさんの質問が出ました。一緒に写真を撮ったり、触れ合ったりすることでうれしい気持ちになりました。この人権教室では、友達と仲良くすることや協力することの大切さを学ぶことができました。



### ○中学部○【自分のこと、友達のこと、伝え合うこと】

「友達と協力してオリエンテーリングをしよう」の授業では、「どうぞ」「ありがとう」の言葉を友達に伝えたり、カードを手渡したりするなど、ミッションをクリアしながら友達と協力することの大切さを体感することができました。「好きなもの なんだらう？」の授業では、好きなものとして「友達」をあげたのをきっかけに、「やさしくする」「いじわるをしない」など、お互いの「好き」を大切にするために何ができるのか考えました。絵本「スーツケース」を教材にした授業では、それぞれ登場人物の役になって劇をすることで、登場人物の気持ちを理解することにつながりました。「怒り」をテーマに



した授業では、怒りの表し方や何に対してどのくらいの強さで怒りを感じるのかなど、自分のことだけでなく、友達のことについても理解を深めました。

## ○高等部○ 【自分も友達も周りの人も大切に】

「自分の名前の由来を知ろう」では、一人ずつにあらかじめ書いてもらっていた家庭からのメッセージを読むことで、名前には子どもの誕生を祝い、健やかな成長を願う気持ちが込められていることを知りました。自分がかげがえのない存在であることと、友達も同様であることを確認し、自分も友達も大切にすることを学習しました。

「友達と仲良くするためにできることを考えよう」では、人と違うからこそ、視野を広げることができたり、自分の知らない世界を知ることができたりすることに気づき、自分とは違う相手の良いところを見つけて、仲良くしていきたいと考えられるようになりました。また、同じテーマで実施した他のクラスは、もらった人がうれしい気持ちになるように、感謝の気持ちや頑張っているところなどを手紙に書き、友達に渡しました。手紙をうれしそうに読む姿が印象的で、お互いを大切にすることが高まりました。

SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）やインターネットを用いた人権侵害」の授業では、動画を参考にしながら、SNSの危険性について考えました。「許可なく写真を投稿しない」ことや「いじめをしない」「友達の名前、メッセージ、IDを流さない」などをビデオ視聴から学ぶことができました。



## 大島青松園 現地研修会について

まだまだ暑さの残る8月20日（月）に、人権・同和教育現地研修で職員19名、保護者4名の計23名が国立療養所大島青松園を訪問しました。ハンセン病は、感染力がとても弱く薬で治る病気でありながら、国の誤った政策で、病気にかかると強制的に療養所に入れられました。そのため、治らない怖い病気であるという間違った知識が広まり、本人はもちろん、引き離された家族も含めて厳しい差別に合いました。ハンセン病患者が隔離されていた大島で、その歴史や現在の状況を知り、正しい知識を持つことの大切さを強く感じました。全ての人の人権が尊重されるように、一人一人がどうするべきか考えさせられる研修でした。

「多様な他者の存在を認め、寛容であること、生かされている自分の使命は何か、深く考えさせられた。ビデオで見た野村さん（大島青松園で暮らしている元ハンセン病患者の方）の笑顔に、『生きていることは素晴らしい』とも感じさせてくれた。」（参加者のアンケートより）

「せめて死後の魂は風に乗って島を離れ、自由に解放されますように」という願いが込められたモニュメント「風の舞」にて



## 第70回 四国地区人権教育研究大会（徳島大会）に参加して

人権・同和教育主任 三好 望

7月12日、13日に徳島県において「第70回四国地区人権教育研究大会が開催されました。この大会は、「四国はひとつ」の合言葉のもと、同和問題をはじめとする、さまざまな人権問題の解決と、すべての人が尊重される社会の実現をめざしてきました。今回はオンラインでの参加でしたが、特に心に残ったものについて報告します。

記念講演では、辻元一英（芝原生活文化研究所）さんから、阿波木偶の歴史とそれを演じる人々についての話がありました。中内正子さん、南公代さん（阿波木偶箱まわし保存会）による「三番叟まわし」の実演もあり、リズムカルな節回しと人形の動きに引き込まれました。「三番叟まわし」は、徳島県を中心に江戸時代から続く正月の祝福芸です。芸を担う人々には「清め」の役割があり、人々から畏怖の念がもたれていましたが、いつの間にか畏怖の念が忘れられて差別となり、1960年代の高度経済成長期には、この伝統芸能は消えかけました。「戦争や差別、過剰な経済成長で文化が消えようとする」と辻元さんが言う通り、差別は人々を苦しめるだけでなく、地域の文化をも奪うことに胸が痛くなりました。幸い、「阿波木偶箱まわし保存会」が最後の芸人から技術を受け継ぐことができ、現在も徳島県内で約1000軒を回っているそうです。（「三番叟まわし」は、徳島県指定無形民俗文化財になっており、YouTubeでも観ることができます。）

他に、四国中央市立土居東子ども園の取り組みについて、石川理恵さんの発表も心に残りました。このこども園では、「すべての人たちにとって心地よい安心基地になること」「誰もが自分らしく、自分の「好き」を大切にできる場所となる」を職員間での共通認識として保育を進めているそうです。4歳児から入園してきたひなたちゃんは、男の子でかわいい物や服装に、興味を持っていました。母親や保育者、周囲の子ども達もそのことを自然に受け入れていましたが、祖父母からの反対もあり、親子で悩みや迷いが出てきました。そんな頃、「性は多様」と題した講演会の後、ひなたちゃんは自分から手を挙げて、「ぼく、スカート履いてもいいですか？」と質問しました。講師の方から、「好きな服を着てもいいと思います」と言ってもらえ、ひなたちゃんは晴れ晴れとしていたそうです。そこにいるのに、「いないもの」にしてしまっている現実に、大人たちは深く考えさせられたそうです。その後、こども園ではこれまで当たり前にしてきたことの中にも、人を傷付け、差別につながっていると感じる unnecessary 男女区別や行動制限を見直していきました。小学校も入学前から「スカートを履いて学校に行きたい」というひなたちゃんの思いに寄り添い、一緒に考えてくれました。小学2年生になったひなたちゃんが、母親に「生まれ変わっても、男の子の体で、女の子の気持ちで生まれたい」とつぶやいたのは、ありのままにいられたことの証ではないでしょうか。学校が、子どもにとって安心できる居場所になることや、自分の「好き」を大切にできる場所になることを願っています。

